

令和元年度練馬区立光が丘さくら幼稚園学校評価報告書

練馬区立光が丘さくら幼稚園
園長 日高文子

1 自己評価結果

(1) 概要

今年度も保護者アンケート回収率が100%で、全保護者の意見を集約し考察することができた。このことは、園の教育について保護者の関心が高いと読み取れる。園の教育活動全体について、どの項目もA、B合わせると95%以上の評価を得た。「教育目標を概ね達成している」と肯定的に評価されている。特に特色ある教育活動では2項目に対して、また「保護者・地域と共に歩む教育活動について」と「園からの提供について」の項目、それぞれ1項目が100%の方から概ね達成しているという評価であった。「保護者が困ったり悩んだりしたときに相談に乗ってくれる」の項目で数人「あまり思わない」という評価はあるが、昨年と比較すると減少している。これは、保護者同士をつなぐ「こあらトーク」を始めたり、こまめに声掛けをしたりしたことで改善されたと読み取れるが、保護者の子育ての悩みは尽きないと受け止め、今後も丁寧に対応していく必要がある。自由記述で、ホームページなど外への発信をもっと積極的に行うとたくさんの方が公立幼稚園の良さを理解できていいのではないかという意見があった。様々な思いが自由記述から読み取ることができ、幼稚園へのエールと共に、改善の視点として生かしていく。

【成果】

- 「子供たち一人一人のやりたいこと、ペースを大事にし、のびのびとした保育をしてくれている所や良いところを見て伸ばしてくれるところが良い。」という多数の意見をいただいた。そのことから子供たちは、自分らしさを発揮しながら自己発揮していると捉えられる。また、子供たちの学びや育ちを意識した「見える化」への取り組みを行ってきたところ多くの保護者から、一人一人を大切にする保育・教育という評価を受けた。
- 園内研究では、「主体的・対話的で深い学びを目指して」～夢中になって遊ぶ幼児を育てるための幼児理解と援助の工夫～をテーマとし取り組んだ。文部科学省の幼稚園教育理解推進事業として本園で東京都教育庁主催の幼稚園教育研修会が行われた。そこで保育公開と発表を行った。そのことを通して、「幼児理解に基づいた評価」「特別支援教育・交流及び共同学習」の2つの視点から本園の取り組みをまとめることができた。都内の私立幼稚園、公立幼稚園、小中学校の教員、行政関係者などの方から評価されたことは、教員の大きな学びとなった。その後文科省主催の中央協議会で発表し、全国の関係者から評価を得られた。教員は、互いに刺激し合い自ら学び続ける教師集団であり、質の高い保育を目指している。
- 介助員を含めた全職員体制での対応等、幼児一人一人への理解を深め同じ方向に向かい教育活動に臨めた。また、3歳児一年保育職員、介助員との連携では、こまめに研修、園内委員会、声の掛け合いを行行情報共有、目指す方向の確認などを行った。互いの立場を尊重し信頼関係を土台にきめ細かな援助に努めてきた。
- 学校地域連携推進事業の取り組みを通し「地域の方との交流が盛んで地域とのつながりを感じる」「これからも地域との密着性を大切に、子供たちはもちろん、保護者にとっても落ち着ける場所であってほしいです。」という意見があり保護者も満足していると考えられる。

【課題】

- 「子育てや我が子の発達に悩むママ達がお互いに相談したりゆっくりしたりできる場所があるといいと思う。」という意見をいただいた。保護者・地域とともに歩む教育活動を目指しているが、この項目からは毎年、子育てに悩むからこそCやDの評価としていると思われる方が数名見受けられる。
- 「今の日本はいろんな国から来る人がいて、グローバルの世界の中に子供たちに外国文化ももっと分かるようになるといいかなと思います。」という意見をいただいた。本園にも外国籍の方が増え、親子ともに言葉の問題や文化習慣の違いに戸惑う姿が見られる。
- 「乱暴が多いなと感じたり、耳にしたりすることがあります。」「言葉遣いが気になる」などごく少数ではあるが意見として挙がっている。様々な特性の子供たちが在籍する本園では、理解し合い互いの良さや得意なことを認め合う関係性を育てていくには、時間と丁寧な援助が必要である。

【改善策】

- 子供の発達や子育ての悩みを相談し合える場として、今年度から、「こあらトーク」を始めた。修了生保護者や他学年の保護者と子育ての話ができる機会を設定したところ「すごくよかった。」と参加した保護者から多数賛同を得た。引き続き行っていく。また、日頃の相談、保育参観、懇談会、個人面談、園行事でのボランティアなどの在り方も引き続き工夫して、保護者同士がつながり合い支え合っているよう働きかけていく。
- 学校支援コーディネーターと連携して、子供たちにとって、ひと・もの・ことの豊かな経験を積み重ねていけるようにし、そのことで、我が子や他の園児の成長を喜べる関係性を応援し、子育ての楽しさ・難しさを共有できる関係を構築する。また、教職員も保護者も共に育ち合えるように努める。
- オリンピック、パラリンピックが開催される来年度、世界に興味関心をもてる環境を工夫したり働きかけたりしながら多様性を理解し親しめるように働きかけていく。
- 幼児は、まだまだ感情のコントロールや表現の仕方が未分化であることを踏まえ、その子の困り感や思いに寄り添いながら、その子自身の気づきを促す援助を工夫していく。その中で友達との関係性を温かいものにし社会性を育てていく。また、家庭との連携を重視し職員のチーム体制も強めていく。

(2) 根拠となる資料

自己評価総括表（表1） 保護者アンケート集計結果（添付資料1）

2 学校関係者評価

(1) 総括

【成果】

「幼稚園では、一人一人の幼児に対し思いをもって教育していることがとてもいいと感じる。」
「遊びや生活の中で様々な経験をしている。一見危ないと感じるような道具も活用しているのが良い。生活の中にあつた技能や言葉を中学生でも使えなくなりつつあるのを感じる。園の行事などで、保護者も子供と一緒にできるのが良い。率先して大人がやるのが子供たちには良いと感じる。」等のご意見をいただき子供たちの育ちや保護者の子育ての様子、指導内容など園で取り組んでいることを評価していただいた。また、発達に視点を当てた話（こあらトーク）の機会ができたり日頃の園の様子が園長の話や写真・映像で分かる「取組ノートやさくらトークがあつたりして保護者もいくつか選択肢があるのが良い。」という意見をいただいた。

【課題】

- 保護者も子供と一緒に様々な体験をし子供の気持ちや遊びの面白さを感じて子育てができるようにする。
- 特別な配慮を要する幼児（外国籍の幼児を含む）が増え集団の中で伸び伸びと育っている中で、さくら幼稚園は、配慮が必要な子が入れる幼稚園という認識が広がっているようにも感じる。みんなの幼稚園、みんなが育つ幼稚園ということや公立だからできる教育をしているとアピールしていくと良い。
- 「みんな友達の日（幼稚園公開日）」未就園児保育などを行い地域に幼稚園を開いていても、初めての人はなかなか入りづらいところがあると思うので、気軽に園に行ってみようという気持ちが持てる工夫をしたらどうだろうか。

【改善策】

○保護者への働きかけについて

教育活動の取り組みや成果の「見える化」「分かる化」を引き続き工夫する。

- *引き続き保護者の園の教育への理解を深めるために、画像や配付物など具体物を通して、教師の願いや子供たちの思いや育ちをタイムリーに分かるように伝えていく。
- *保育参加日や参観、面談などのもち方を工夫し、保護者も心を動かす体験をし共感性をもって子育てができるような工夫をする。
- *在園児保護者が園の教育に魅力を感じ地域の方や未就園児親子に対してアピールできるような働きかけや、来てよかったと思えるような取り組みの工夫や園の雰囲気づくりをする。

○教員の資質向上

チームで行うインクルーシブ教育の推進と、主体的な遊びの指導の充実

- *一人一人の幼児理解を深め幼児の実態や発達に即した指導が包括的に進められるようするとともに、専門性が高められる研修が行える体制を整える。
- *園の全ての教職員（様々な立場の職員）がチームとして同僚性を高める。協働性、信頼関係を構築し力量を高める意識をもつ。

○運営の効率化

2年間の教育活動に見通しをもち、指導計画、行事などの立案を行っていく。柔軟に運営しながら教育の全体計画についても意識しながら教育活動を行う。

教員が余裕をもって保育に当たることができるよう、運営の効率化を更に進める。また分掌についての進捗状況の確認を行い工夫・改善を行い働き方改革も併せて進める。

(2) 根拠となる資料

学校関係者評価一覧表（表2）

3 評価結果の公表等

学校評価結果および学校関係者評価の結果の概要を事前に配付し、年度末（2月27日）の学年保護者会において説明した。同時に学校関係者評価の実施報告及び今後の改善点についても評価結果の最後に付け、口頭で説明した。

また、本園HPには、3月20日以降に学校評価の日程及び総括的自己評価及び学校関係者評価の結果の概要を掲載する。

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 幼児期の豊かな体験を保障し、確かな学びの芽につなげる幼児教育の実践② 課題の発見と解決に向けて主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成③ 区立・地域の幼稚園としての子育ての支援を推進 |
|---|

- ① 「心揺さぶられる豊かな体験を充実させ「主体的・対話的で深い学び」のある幼児教育の実践」をテーマに夢中になって遊ぶ姿から育みたい資質、能力（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）を視점에幼児理解を深め教師の援助や環境について考え合ってきた。そこで読み取ったこと、幼児の育ちへの教師の願いなどを保護者や地域に様々な方法で伝える努力を行った。地域、保護者の理解は深まってきているが、これからも丁寧に遊びの中で何を学んでいるのかを具体的に伝え、保護者も見通しをもって子供たちの遊びや生活を見守れるようにする。さらに教師も、幼児と共に楽しみを発見できる援助を行い、遊びや育ちを読み取る教師の確かな目を養い、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が、夢中になって遊ぶ中で伸びやかに育っていくようにする。そのためにも、引き続き豊かな感性と感覚・表現力を育む直接体験や自然体験ができるような環境の見直しと改善を行い、幼児が経験したことや感じたことが、様々な形で表現され遊びや生活を豊かにしていく保育の実践を行う。
- ② 「主体的、協動的に教育活動に取り組む喜びを感じる教員の育成」については、互いの立場を尊重し信頼関係がある。相互啓発する土壌もあることをさらに深化させチーム力を高めていく。打ち合わせや会議の持ち方を工夫するとともに園内研をさらに充実させ、教員一人一人の資質向上を目指す。
- ③ 「区立・地域の幼稚園としての子育て支援の推進」については、未就園児保育、施設・園庭開放、行事などの充実をさらに進め就園前の親子の居場所となるようにしていく。また、今年度同様に近隣の保育園とも連携を取り、幼保小の連携を視野に入れた幅広い子育ての情報を提供し、家庭、地域との連携を推進していく。また、区の施策で行う3歳児1年保育の預かり事業を引き続き行い、待機児童解消に取り組む。

(2) 今後継続して追及していきたい課題

○幼保小連携教育の推進

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、育みたい資質・能力・スタートカリキュラムを共通の話題として相互理解を深める。そして幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を推進する。近隣の小学校、保育園（第11、第9保育園）との意図的計画的な交流、教師間の情報共有など行い、さらに幼保小連携教育を進めていく。

○子育て支援教育の充実

子育てに不安を感じている保護者や家庭に諸事情を抱える保護者が増えている。また幼児だけでなく兄弟姉妹など家族に関する相談に訪れる保護者もいることから、子育て支援のニーズが高まっていることが分かる。サークル活動を園の行事・未就園児保育に活用したり、保護者向けの子育て研修、行事の工夫等を引き続き積極的に行い、子育てのヒントや楽しさを伝え、保護者同士の良好な関係性を支援する。

○特別支援教育の充実、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実

研修、共通理解を重ね、一人一人の幼児の特性に応じて援助を行う。幼児理解を深めスモールステップを心掛けた共感性の高い援助をしチーム保育を充実させる。また幼児が「友達大好き」「自分も大好き」「幼稚園大好き」と実感できるような教育活動を展開する。